

14 学習者の自律

「自律」(autonomy)を日本語で理解するには、「自立」との違いに注意が必要である。『デジタル大辞泉』は、前者を「他からの支配・制約などを受けずに、自分自身で立てた規範に従って行動すること」、後者を「他への従属から離れて独り立ちすること。他からの支配や助力を受けずに、存在すること」と説明しており、「自律」という言葉からは、より積極的、能動的に選択、行動していくイメージが汲み取れる。言語学習における自律の学問的意味も、概ねこれと重なっている。多様で複雑な世界の中を、言語学習者として何を考え、どう振る舞うかがキーワンセプトとなる。

● 自律の定義と多次元性

欧州評議会 (Council of Europe) による Modern Languages Project で、自律の考え方方が本格的に言語学習へと導入された。Centre de Recherches et d'Applications Pédagogiques en Langues (CRAPEL) が設立され、その中心人物の1人である Henri Holec が、自律を「自分の学習に責任を持つ能力」と定義し (Holec, 1981, p. 3), 責任の対象となる側面として、学習目標の設定、学習内容と進度の決定、学習方法の選択、学習過程のモニタリング、習得内容に対する省察等を挙げている。その後の議論で自律には多様な要因が関わることが明らかになり、定義の難しさが強調されるようになった (Little, 1991)。

現在では、1つの定義に集約するのではなく、**自律の多次元性 (multidimensionality)** に焦点を当てる考え方が主流である (Benson, 1997, 2011; Oxford, 2003)。中でも Benson (2011) による説明は、この多次元性を上手く捉えている。彼によれば、自律とは「自分の学習をコントロールする能力」(p. 58) であり、コントロールの対象として、(1) 学習管理 (learning management: 目標設定、教材選択、時間管理等)、(2) 認知的処理 (cognitive processing: 言語習得や学習プロセスに対する認知レベルでの省察等)、(3) 学習内容 (learning content: どのような内容をどのような理由から学ぶのか等) の3つを挙げ、これ以上集約させて定義するのは難しいと主張している。

● 自律の育成

自律性を育成するには、指導者はもちろん学習者もそれが持つ特徴を知らないなければならない。Sinclair (2000) は、先行研究に基づき以下13の視点を提唱して

いるが、これらは教育実践にも有用だと考えられる：(1) 自律は能力である、(2) 自律は自分の学習に責任を持つとする意志と関わる、(3) 責任を持つとする能力や意志は必ずしも生まれつきのものではない、(4) 完璧な自律はあくまで理想的な目標である、(5) 自律にはレベルがあり、そのレベルは何を対象とするかで異なる（例：語彙学習 vs. 発話練習）、(6) 自律のレベルは時系列的に上下する、(7) 学習者を誰にも頼れない1人の状態にしておけば自律性が育つというものではない、(8) 自律性育成には学習過程に対する意識的な気づきが必須である、(9) 学習方略を教えれば自律が促進されるというわけではない、(10) 自律性は教室の内外で育成できる、(11) 自律は個人的側面だけではなく社会的側面も持つ、(12) 自律性の育成には心理的側面だけではなく政治的側面も関わる、(13) 文化が異なれば自律の解釈も異なる（日本語訳作成には、小嶋（2010）も参照した）。

これらの原理は、自律は多面的で複雑な概念だが、適切な指導を通して育成可能な能力や意志であることを示している。例えば、授業内で学習方略を教えつつ、各人の生活スタイルにどのように組み込むかまでを具体的に考えさせ、教室外での学習遂行を記録、提出させ、教員からフィードバックを与えるといいかもしれない。また、学習者を1対1でサポートする言語学習アドバイジングも有効だと考えられる（「15 言語学習アドバイジング」の項を参照）。

●今後の課題

自律が言語学習に不可欠なのは間違いない。しかし、全ての要素を自律的にコントロールするのは難しいと考えるのが自然である。例えば、Csikszentmihalyi (1975) が提唱したフロー（flow）という概念は「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感覚」(p. 66) と定義され、近年では言語学習におけるフローの重要性が認められてきている (e.g., Czimmermann & Pinel, 2016)。一方で、Csikszentmihalyi (1975) は「意識が行為から分離しあらじめると、人はその活動を『外から』眺めることになり、フローは妨害される」(p. 69) と述べている。これは、自律により意識的なコントロールが高まり、客観視がうまく働くほど、目前の活動への没入が難しくなることを意味するものと考えられる。人間は深く複雑な生き物である。自律の対象がどこまでで、そのコントロールの及ばない領域は何か、両者はどのように並立し得るかということを、さらに考察していく必要があるだろう。

（安田 利典）